

再現認知とオンゴーイング法による教師の力量形成に関する研究

新潟医療福祉大学 西原康行

【背景】

行為の中で省察しながら進められる教師や指導者の仕事が認知科学の領域では、一定の解決手続きの存在しない、その場の状況によって対応しなければいけない創造性と、その時のタイミングを要求される技能性の2つを必要とする創造性技能領域に位置づけられている(大浦, 2000)。本研究は、以上の概念と仕事の位置づけを勘案して、次の2つの趣旨により研究デザインを組んだ。

一つ目は、今、目の前にいる学習者にどう対応するかという問いに答えることである(Graham et al., 1993)(Weiyun, 2000)。二つ目は、日本の教師研修プログラムとして特徴のある「校内研」を教師が一人でも手軽にできる方法を探りたいということである。日本の教師研修プログラムである「校内研」は、国際学会で「Kounaiken」として呼ばれ、高い評価を受けている。しかしながら、日本の誇る校内研は、同僚教師の協力が必要であり、研究授業を段取らなければいけないことから、なかなか日常的に気軽にできるものではない。そこで、教師やスポーツ指導者が一人でも簡易に自らの授業や指導を省察できる方法を探る。

また、授業あるいは教師の働きかけは、環境条件がコントロールされた実験室の中で行なわれているものではなく、日常的に様々な環境条件の中で「行為」として行なわれていることを考えると、一部の現象だけを取り上げたり、さまざまな環境条件をコントロールして理論化することよりも、環境が統制されない日常の授業での自然の教師の行為をとらえていくことが必要である。

以上の趣旨により、Gibson(2006)のアフォーダンスを援用して、今この場で起こっていることの認知を後に再現認知する方法(西原, 2007)とオンゴーイング法(生田, 2000)により、今この場で起こっていることの教師の認知を試み、教師の力量形成の手法の一助を得る。

【方法】

調査対象者は、以下のとおりである。

A指導者(初心指導者): K大学サッカー部コーチであり、コーチ歴は1年。

B指導者(熟達指導者): K大学サッカー部監督であり、コーチ歴は11年。

C指導者(熟達指導者): K大学サッカー部コーチであり、コーチ歴は12年。

以上の3名は、以下の2つの方法で「何を認知しているのか」といった問いを持ち、自らの語りを引き出した。

①指導者にマイクを付け、「指導時の今、何を認知しているのか」(オンゴーイング)の語りを録音した。

②指導時にカメラ撮影者を帯同し、指導者がどこを見ているのかを映像として追って撮影する。指導2日後にその映像を指導者が観ながら「何を認知していたのか」を語る再現認知を行なった。再現認知の際に、対象者は指導VTRを観ながら、「なにかを見取っている場面」で、「ストップ」と宣言して映像を止め(静止画とする)、指導時になにかを見取っていたのかを語る。語り終えたら、引き続き映像の再生を続けた。

指導時間はいずれも12分間である。

A指導者、B指導者、C指導者がそれぞれ指導をする際に、指導していない2名も指導空間の外から指導者同様、自らが指導者のつもりで何を認知していたのか語る(オンゴーイング)と、カメラマンを帯同させて映像を採取した。

【結果と考察】

まず、各指導者の語りの内容を分析すると、A指導者(初心指導者)は単一事象しか認知していない割合が多く、B指導者(熟達指導者)とC指導者(熟達指導者)は、多くの事象の認知を浮き彫りにできていた。さらにA指導者に比してB指導者とC指導者は、複数の事象を同時に認知していた。また、B指導者とC指導者はフィードバックやフィードフォワードの語りが多くなっていた。ただし、A指導者も再現認知では複数の事象を同時に認知していた。

次に、各指導者間の認知の一致度を分析してみると、A指導者とB指導者、A指導者とC指導者のオンゴーイング認知の一致率は低いのに比して、B指導者とC指導者のオンゴーイング認知及び再現認知の一致率は高い。A指導者の指導時には、B指導者、C指導者ともにA指導者との一致率において有意な差が出ていた。また、B指導者の指導時には、C指導者とA指導者の一致率において有意な差が出ていた。さらに有意差はないが、割合は全体的にA指導者がB指導者とC指導者と一致しない傾向にあった。このことから、オンゴーイング認知は、初心指導者よりも熟達指導者の認知を浮き彫りにする際に有効に機能する傾向にあるといえる。

次にA指導者はオンゴーイング認知よりも再現認知でB指導者やC指導者と一致する率が高い傾向にあった。このことから、初心指導者は指導時のオンゴーイング認知より指導後に映像を見ながらの再現認知がより有効に機能すると考えられる。

また、A指導者、B指導者、C指導者それぞれの指導で、実際の指導者と観察者で認知の数や一致率は変わらない傾向にあった。このことから指導(授業)当事者と観察者でオンゴーイング認知と再現認知に変化は無いといえる。これは、例えば体育の授業研究の際に、授業者と指導主事が同じ尺度

【認識】でリフレクションすることが可能となることを示唆している。

さらに、A指導者は再現認知で新たな気づきが生まれる傾向にあった。そして、A指導者がオンゴーイングよりも再現認知でB指導者やC指導者と認知が一致する傾向にあることを加味すると、初心指導者は指導時のオンゴーイング認知より指導後に映像を見ながらの再現認知がより有効に機能すると考えられる。

【文献】

- 1) 西原康行(2007) スポーツ教育における教員の再現認知による力量形成に関する研究. 科学研究費補助金成果報告書(課題番号: 18650173)。
- 2) Nishihara, Y. and Ikuta, T.(2008) Research Respecting Situational Cognition on the Part of Sports Instructors. Educational Technology Research, 31:133-142.
- 3) 大浦容子(2000) 創造的スキル領域における熟達化の認知心理学的研究. 1-6.
- 4) Weiyun, C.(2000) Examination of Expert and Novice Teachers' Constructivist-Oriented Teaching Practice Using a Movement Approach to Elementary Physical Education. Research Quarterly for Exercise and Sport, 71-4:357-372.